

日本マスコミュニケーション学会 第35期第7回研究会（放送研究部会主催）終わる  
「映画とテレビから考える1964年＝東京オリンピックの時代」

日 時：2016年9月23日（金）18:00～20:00  
会 場：立教大学池袋キャンパス10号館X107教室  
報 告 者：日高勝之（立命館大学）  
司 会：笹田佳宏（日本民間放送連盟）  
参 加 者：17名  
記録執筆者：笹田佳宏

4年後に2度目の東京オリンピックを控えるという状況のもと、前回の1964年のオリンピックの時代の放送のありようを考えるため、今回の研究会を企画した。

日高勝之氏からは、映像メディア同士でありながらテレビと映画は同時に語られる機会は決して多くないとする問題意識から、当時のテレビと映画のインターフェイスに焦点をあてた報告を頂いた。概要は次のとおり。

1964年は、テレビが多くのご家庭に普及し、カラー放送も広まった時期であり、テレビ東京の開局、衛生中継が始まるなどテレビがメディアとしてのパワーを発揮しだした時期である。一方、1951年から始まったとされる「映画の黄金期」は、1964年が末期であった。テレビという新しいメディアが成長する中で、映画とテレビは敵対しながらも、映画監督のテレビへの進出など作り手の人的交流、映画スターのテレビ進出、テレビでの映画の放送など、「映画とテレビが共存の道」を図った。

東京オリンピックが開催された1964年は、1955年から1973年頃の高度成長期の中央に位置し、予想を上回る経済成長を達しつつある時期であったが、映画やテレビなど映像メディアをめぐっては、こうした動向をもとに、ハードとソフトの両面で現在のありようにつながる構造的かつ不可逆的な「原型」とでもいべきものが複合的に芽生えた重要な時期となったと指摘した。

また、批評空間においては、映画雑誌でのテレビ批評の本格導入が行われた時期でもあった。こうした中で『キネマ旬報』は、「映画とテレビとショーを総合的に取り上げる新しい批評空間を創出」、「ショーをテレビと映画の結節点にした業界再編を視野に入れた紙面づくりをしたこと」などを紹介。そして、テレビ界では、「エド・サリバン・ショー」「ディック・パウエル・ショー」など輸入番組とともに、日本の放送局でも「夢であいましょう」「シャボン玉ホリデー」などが制作され、映画界では、和製ミュージカルの試みとして「君も出世ができる」「日本一のホラ吹き男」などが制作されるようになったとする。

共存の道の模索や批評空間からの新たな提案があったものの「映画とテレビは、融合しつつも分離した。それと共に、映画はテレビとの覇権争いにおいて敗北した」と指摘した。

報告の後、映画とテレビの共存や、ショーを接点とした両メディアなど様々な視点から、活発な議論が繰り広げられると共に、今夏のリオデジャネイロオリンピックの放送のあり方や1964年の東京オリンピックの制作体制についても議論が広がった。